ひとが育つまち益田

「ひとが育つまち益田」の実現に向けて
～「ひとづくり」の取組と若手職員の想い～ Vol. 2

市では「ひとづくり」を重要な要素として「ひとづくり推進本部」を設置し、3つの部会で取組を推進しています。

今回は「産業の担い手」部会を担当する産業支援センターに所属する若手職員が、取組内容の紹介と「ひとづくり」に対する想いを語ります。

ひとづくりに関するどのような取組を担当していますか

全国的に、都市部で就労する方が多い中で、益田で働くことを選ぶ若者もいます。市では、益田で働く若者が益田の魅力を肌で感じ、その魅力と自分の仕事や会社の関わりを知ることで、よりいきいきと働き、暮らすことができるように支援するため、新入社員研修「Masuda no Douki（益田の同期）」を実施しています。私は、この研修の企画運営を担当しています。

ひとづくりの取組に対する想いを教えてください

厚生労働省が公表したデータによれば「新社会人の3人に1人は3年以内に仕事を辞める」状況にあります。私が最初に就職した会社では、同期入社の社員も年齢が近い先輩もおらず、常に孤立感を抱えていました。徐々に「辞めたい」と思うようになり、結果的には辞めてしまいました。

もしも、その頃に「Masuda no Douki」研修のような、同じ益田で働く同年代の若者が悩みを共有できる場があれば、結果は違っていたのかもしれません。私は、この自分の体験から、益田で働くことを選んだ若者のサポートをしたいと思っています。研修参加者が、将来、益田の企業を担う次世代の経営幹部や経営者として活躍してくれることを期待しています。

「Masuda no Douki」研修参加者

これからどのようなことに取組んでいきたいですか

この研修は、今年度から始めた取組です。初年度の参加者を一期生と位置づけ、まずは一期生どうしのつながりを深め「横のつながり」としてのコミュニティを形成しました。今後は、このコミュニティをどう広げ、深めていくのかが課題と考えています。これから新たに誕生する二期生・三期生とは、先輩後輩としての「縦のつながり」を深めることを意識し、取組を進めていきたいと思います。

問 市政策企画課 ☎31・0121

日本遺産のまち益田の歩き方

第17回 神宝山八幡宮（しんぽうざんはちまんぐう）

【問い合わせ先】
益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会
文責：市文化財課 ☎31-0623

神宝山八幡宮は、美都町仙道の小高い丘の上に位置します。鳥居のあたりからは、仙道地域を見渡すことができます。

丘の上に長い参道があり、その突き当たりの階段を上がると、鬱蒼とした木々の中に神殿がたたずみ、厳かな空間となっています。神殿の左右には摂社（境内にあわせて祀られている神社）が6つもあります。階段を下りると、神殿に向かって左手に弾丸の形をした忠魂碑が、右手に神楽殿があります。神楽殿には天井絵や絵馬があります。

永徳3（1383）年の益田兼見の置文（家訓）には東仙道八幡宮とあり、その放生会（捕獲した魚や鳥獣を野に放し、殺生を戒める宗教儀式）のいろいろな役目は、昔から「両山道」（現在の東仙道と北仙道）の人々が務めてきたことであり、今後もきちんと務めるべきこととして記されています。

また、同じく兼見の置文には、益田氏ら御神本一族の氏神の臼口大明神が、兼見の祖父兼弘により、鎌倉時代の後半に東仙道に勧請（神様を招くこと）されたと記されています。当時は神宝山八幡宮とは別の場所でしたが、現在は神宝山八幡宮に合祀されています。

氏神が東仙道に勧請されたのは、当時の益田氏が東仙道を本拠としていたからだと考えられています。実際、東仙道には、官衙（古代国家の役所）やその関係施設と考えられる遺跡（酒屋原遺跡、下都茂原遺跡）や、高級な輸入陶磁器や石塔が出土し有力者の館跡と推測される遺跡（東仙道土居遺跡）があります。

神宝山八幡宮に参拝し、丘の上から仙道地域を見渡した後は、麓の地域もぜひ散策してみてください。

場 美都町仙道1787
石見交通バス都茂線
久保坂バス停徒歩7分

東仙道の景観